頼山陽記念文化賞受賞者一覧

（その１）

回・年度	受　賞　者	主　な　受　賞　理　由
第１回 【昭和 58 年度】	太刀掛重男（72 歳） 新制作座	多年にわたり頼山陽の研究と献詠詩の募集，編集に尽力した。 多年にわたり全国各地で「頼山陽」を公演し，演劇を通じて多くの人々に頼山陽についての理解を深めるうえで貢献した。
第２回 【昭和 59 年度】	村上幸彦（66 歳） 中村昭三（45 歳）	多年にわたり頼山陽について研究を続けるとともに，広島城の復元などに尽力した。また，多年にわたり県史跡「頼杏坪役宅」の保存・管理及び一般公開に積極的に努めた。
第３回 【昭和 60 年度】	阪田泰正（72 歳）	医師として医療に携わる傍ら，郷土の歴史・文化の研究を続け,地域文化の振興に貢献した。
第４回 【昭和 61 年度】	北川　勇（76 歳） 竹原郷土文化研究会	頼山陽とゆかりの人物について特色ある研究を続けるとともに，読書会の実践と指導に尽力した。また，地域における歴史と文化の継承と創造の活動を推進するとともに，街並み保存に貢献した。
第５回 【昭和 62 年度】	賀谷倭登（62 歳）	多年にわたり頼山陽と地域のかかわりについて研究を続けるとともに，資料の収集，公開・展示や講演活動を通して頼山陽についての啓発活動に尽力した。
第６回 【昭和 63 年度】	真下三郎（81 歳）	広島県文化財保護委員として，民俗芸能の調査研究や保存に努め，地域文化の振興に貢献した。
第７回 【平成元年度】	益田与一（81 歳）	頼山陽とその作品についての研究を続けるとともに，その研究をライフワークとし，「芸備歴史散歩」にまとめて刊行した。
第８回 【平成２年度】	財間八郎（91 歳）	尾道地方の文化財調査や保護に長年携わり，尾道における頼山陽関係の文献の発券，整理などに貢献した。
第９回 【平成３年度】	菅波　寛	菅茶山とゆかりの人物について研究を続けるとともに，郷土文化の振興に貢献した。
第 10 回 【平成４年度】	藤村耕一	地域の文化財保護と調査研究に尽力し，郷土文化振興に貢献した。
第 11 回（平成５年度）～第 13 回（平成７年度）は，該当なし。		
第 14 回 【平成８年度】	池田明子（50 歳）	頼山陽にかかわる研究や文化活動に尽力し,その研究成果を「頼山陽と平田玉蘊」にまとめて刊行するなど，郷土の文化振興に貢献した。
第 15 回 【平成９年度】	熊本県苓北町	長年にわたり頼山陽公園，頼山陽詩碑等の建設・建立・整備等を通じて，頼山陽の顕彰と文化継承に尽力した。また，平成７年度から開催する『吟詠「泊 天草洋」全国大会』を通じて，名吟の継承と地域文化の振興を図った。
第 16 回 【平成 10 年度】	門　玲子（67 歳）	昭和 48 年から，江戸時代後期の文人江馬細香の研究を継続し，その第一人者としての地位を確保した。また，江馬細香と関わりのあった頼山陽の隠れた側面を，細香の書簡などで紹介した。

（その２）

回・年度	受　賞　者	主　な　受　賞　理　由
第 17 回 【平成 11 年度】	稲葉長輝（83 歳）	昭和 44 年から月ヶ瀬村内の古文書研究や文化財調査・保存活動に尽力した。この中で，頼山陽と月ヶ瀬村との係わりについて研究を重ね，山陽来村の事跡を解説・紹介した。
第 18 回 【平成 12 年度】	頼杏坪先生伝を読む会	平成 8 年 1 月にこの会を結成し，研究の成果として平成 11 年 12 月に「頼杏坪と運甓居―備北での足跡―」を出版した。また，平成 12 年 3 月には，出版に際して使用した資料の所蔵や，今後頼杏坪や頼山陽に関する資料の収集を図るため，運甓居文庫を創設した。
第 19 回 【平成 13 年度】	見延典子（46 歳）	頼山陽の母である梅颸が 59 年間にわたって書き残した「梅颸日記」をはじめ，多くの関係資料を博捜し，その成果として梅颸の評伝を上梓した。また，数々の文筆活動や講演活動を通して郷土の文化の振興に貢献した。
第 20 回 【平成 14 年度】	入船裕二（79 歳）	「尾道今昔」「玉浦詩話」を上梓するなど，多くの文筆活動を通し，尾道に係わりのある歴史事象や人物，さらには漢詩を紹介し，郷土の歴史の一端に灯りを点じるなど，郷土の文化の振興に貢献した。
第 21 回（平成 15 年度），第 22 回（平成 16 年度）は，該当なし。		
第 23 回 【平成 17 年度】	江差町の歴史を紀行し友好を進める会 （代表 石橋藤雄）	弘化 3 年（1846）10 月，蝦夷地探索の旅に出た頼三樹三郎が，江差雲石楼において，北方探検家松浦武四郎と行った「百印百詩」の偉業を後世に伝えるため，「百印百詩」の顕彰碑を建立した。 併せて『百印百詩を読む』を出版するなど，三樹三郎の業績の顕彰に努めている
第 24 回（平成 18 年度）は，該当なし。		
第 25 回 【平成 19 年度】	藤高一男（68 歳）	「日本外史」の現代語訳に取り組み，平成 13 年 5 月，「頼山陽　日本外史を読む　Ⅰ」を刊行した後順次刊行を続け，平成 18 年 2 月に最終巻となる「頼山陽　日本外史を読む　Ⅴ」を刊行し，全 5 巻が完結した。また，「日本外史」の研究者として頼山陽入門講座の講師を務めるなど，地域の文化の向上に貢献した。
第 26・27・28 回（平成 20・21・22 年度）は，該当なし。		
第 29 回 (平成 23 年度)	古川隆次郎(69 歳)	永年にわたり頼山陽史跡資料館が企画展を開催するにあたり、頼山陽の書をはじめとして、所有する秀逸の作品を幾度となく提供し、来館者に深い感銘を与えるとともに、「頼山陽ネットワーク」を立ち上げ、その代表として全国の 40 余りの団体を統括し頼山陽の業績を後世に伝える組織を造った。

（その３）

回・年度	受　賞　者	主　な　受　賞　理　由
第 30 回 （平成 24 年度）	橋本正勝(66 歳)	約 40 年に亘り頼山陽の遺墨や遺品を数多く収集し、美術館や資料館で展示し頼山陽の思想と業績を広く社会に広めた。又頼山陽の思想を長年研究し、各種団体の集まりでたびたび講演をし、頼山陽の精神と業績を九州を中心に広めた。
第 31・32 回（平成 25・26 年度）は，該当なし。		
第 33 回 （平成 27 年度）	頼和太郎（67 歳）	頼和太郎氏は，ご尊父惟勤氏の遺志を引き継ぎ，頼家伝来の「杉ノ木資料」をさらに有効に活用すべく等財団に寄附された。これによって財団の基本資料が飛躍的に充実したのみならず，頼山陽史跡資料館の発展と頼山陽研究等の進展に多大な貢献をした。
第 34 回 （平成 28 年度）	齊藤裕志(67 歳)	齊藤家は 400 年前美濃から松前に渡り、江差町年寄を勤める 11 代齊藤佐治馬が、蝦夷地遊歴中皮膚病にかかった頼三樹三郎を援けて帰京後も長く親交した。齊藤裕志氏はその縁から「頼三樹三郎研究会」を立ち上げ、頼三樹三郎が江差文人と詩作交遊した「江差八勝碑」建立に尽力し、書軸や書簡の収集　資料の上梓　講演活動などにより、頼三樹三郎の業績を北海道中心に広めることに貢献した。
第 35 回（平成 29 年度）は該当なし。		
第 36 回 （平成 30 年度）	燦燦プロジェクト	燦燦プロジェクトは平成 24 年 7 月九州北部豪雨により流失したには頼山陽先生詩碑再建のため有志で結成され、16 団体の協力のもと、全国から浄財を募り、翌年 12 月山国川を見下ろす耶馬溪町柿坂に再建した。燦燦プロジェクトはその後も詩碑の保全に努め、耶馬溪の名づけ親である頼山陽の足跡や業績を掘り起こして広め、2018 年頼山陽九州遊歴 200 年の賀慶に貢献した。
第 37 回 （令和元年度）	皆川美恵子氏	1988 年にお茶の水女子大学ジェンダー研究センターに発足した「梅颸日記研究会」において中心メンバーとして研究を進め、1997 年にはその成果を著書『頼静子の主婦生活―「梅颸日記」にみる儒教家庭―』にまとめ、出版された。儒学者の家である頼家の生活が厳格な儒教祭祀に基づいたものであることを明らかにし、主婦として頼家の家庭生活を支えた梅颸と頼家の人々の姿を生き生きと描き出した同書は、儒家としての頼家の特質に迫った先駆的研究であり、女性史研究にも大きな足跡を残した。その研究成果は、頼山陽史跡資料館の展示にも反映されている。以上の功績から頼山陽記念文化賞に相応しいと決定された。
第 38 回（令和 2 年度）は該当なし。		
第 39 回（令和 3 年度）は中止。		